



## タンチョウ博士のお話（第18回）

### 〇ツルの仇（？）返し

表題は、字を間違えたんじゃない？と言われそう。確かに、ツルの「恩返し」は有名だ。が、「ツルの仇返し」なんて、事典にはないし、インターネットで調べても…と、ここまで書いて、ちょっと気になり念のためネットで検索してみた。

ところが、あるある。小説やらマンガやら、パロディー風なものがいくつもあった！しかし、共通するのは、どれも架空の話という点だ。では、現実の話はないのだろうか？

北海道のタンチョウ（以下ツル）は、前世紀半ばまで100羽にも満たず、絶滅の危機にさらされていた。しかし、それを救ったのは、お役人や専門家などではない。零下30度近くになる道東の厳しい冬を堪えていた、ほかならぬ地元農家の人々だった。

厳寒期、野山や畑は白一色で覆われ、川や沼などもほとんどが凍ってしまう。湿原や川で水辺の生きものや虫などを捕って夏を過ごしたツルたちは、冬は食べ物を探せない。湧水で凍らないわずかな水辺を頼りに、まさに細々と暮らすしかない。

そんな時、ツルがかわいそうだと、農家の人たちは自分たちの冬越し用の貴重なトウモロコシを、弱っているツルたちに分け与えた。それが冬の餌不足からツルを救い、春の繁殖への活力を強く支えたのである。

個人が始めたこの援助は、やがて広範囲に組織化され、多くの給餌場が作られ、そのおかげで、ツルは絶滅の危機を乗り越えた。ここまでは、「ツルの恩返し」の話の導入と同様である。

さて、あるヒトが鶴居村で酪農業を営んでおられる。ツルの数がまだ少ないころ、牛舎近くでツルを見かけ、めでたいツルが来たと言喜んで餌を撒いておいた。やがて、年ごとにヒトや餌に慣れたツルが2羽、4羽とすだいに増え、酪農家も大いに歓迎していた。

しかし、ツルの総数が増すにつれ、この酪農家へ来るツルも20羽、30羽と増えてきた。

そのうちにツルたちは、牛舎の中まで入り込み、ウシが驚いて暴れ怪我をしたり、ウシ用の餌を発酵させる覆いに穴をあけたり、春撒いたトウモロコシをほじくり出して食べたりするようになった。これをあの大きなトリに集団でやられて、困らない人はいない。つまり数が問題なのであり、まさに恩を仇で返された感じだ。



▲牛舎にまで入り込んで餌を探すタンチョウ

しかし、ツルは仇返しをしているのではない。

この状況は、ヒトが作ったものだからだ。

つまり、起きるべくして起きたのであり、希少種の保護管理に適切な対応策を持たなかった、ヒトの側に責任がある。この現実、まさにイソップ物語であり、そこからヒトはツルとの付き合い方を教訓として学ばねばならない。

最後にひとつ付け加えておこう。長沼町では、上記のような事態は起きえない。なぜなら、長沼町にこうしたツルの大集団をつくる繁殖地なんてどこにもないし、ヒトが餌を与えてツルに恩を着せるつもりもないのだから。（文：正富宏之）